

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 89 号

平成 21 年 9 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-お 912-1960

ヒルティ

「眠られぬ夜のために 第一部」

（草間平作・大和邦太郎訳・岩波クラシックス）より（4）

7 月 21 日

貧しい者をかえりみる人はさいわいである。主はそのような人を
悩みの日に救い出される。主は彼を守って、生きながらえさせら
れる。彼はこの地にあって、さいわいな者と呼ばれる。あなたは
彼をその敵の欲望にわたされない。主は彼をその病の床でささえ
られる。あなたは彼の病むとき、その病をことごとくいやされる。

（詩篇 41・1 3）

人に与えるということも、多くの偉大な事柄と同じように、ただ
実地の練習を通じて学ぶものである。しかし、一旦学んでしまえば、
それは人生の最も大きな喜びの一つとなる。

7 月 23 日

内的生活はいろいろな点で登山に似ている。われわれは、案内人
もなしに登山したり、あるいは道をよく知らない案内人を連れて、
またザイルで体を結び合いもせずに無能な仲間と一緒に登山を企て
てはならない。しかしまた、元来登山のできない人にまで、一緒に
高い山に登ることを求むべきではない。そういうことは、お互いに
不愉快のたねになるだけである。むしろ、もっと低い土地で、道ば
たの心地よいホテルでならば、そのような人たちとも、親密に、互
いに有益に交わることができるものである。

8月2日

わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、私のくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。(マタイ 11・29)

すべて神の御霊に導かれているものは、すなわち、神の子である。
(ローマ 8・14)

聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」ということができない。霊の賜物は種々あるが、御霊は同じである。務めは種々あるが、主は同じである。働きは種々あるが、すべてのものの中に働いてすべてのことをなさる神は、同じである。

(コリント 12・3 - 6)

人の生涯には、いつか突然、単純な信仰の境地が訪れて、神への真の愛がなければ、どんな信仰も、また神の意志についてのどんな歴史的な、あるいは教義的な知識も、魂の向上に役立たないことがわかり、反対に、心の中に神への愛があれば、一切が明らかになり、やさしく、簡単になる、ということを示される。われわれはこのような境地に達しなければならぬ。そうすれば、われわれはすべての哲学書や神学書を閉じてもよろしいし、またそうしたくなる。

神学は、超感覚的な事柄についての人間的な学問である。このような学問が存在しうるかぎり、それはよいもので、大いに尊重すべきである。けれどもまた、超感覚的なものについては、神のみが授けることができる直接的確信が存する。ただ、この場合、自己欺瞞に陥らないために、十分な良識か真の教養が、そしてそのどちらについても誠実な謙遜が必要である。

8月12日

勇気と謙遜とは常に併せ持たねばならない。すなわち、われわれを本当に助けることも、ひどく害することもできない人間に対する勇気と、そして、われわれの内にあらゆる善を創り出し給う神、その恵みによってわれわれが現在ある通りにあることができる神に対する謙遜。しかし、まことの謙遜は勇気に近いものである。というのは、神を真に実在する人格的なものと理解するかぎり、勇気がなければ、とうてい神の眼の前にあえて進み出ることにはできないからである。

「人間は無私の献身によって隣人たちの幸福を生み出したり、それを固めたり、また増進したりするためにはたらくとき、初めて真の人間、つまり神の似姿になり始める。ただ自分だけのために存在するならば、人間とはいったいなんであろうか。」(ヒルシュ『イスラエルの祈り』) ...

8月17日

こういうわけで、安息日の休みが、神の民のためにまだ残されているのである。(ヘブル人への手紙 4・9)

「暇な時間」や「休暇」も、何か無益なことや、それどころか時には有害なことを行うためにあるのではなく、むしろ心身のためによい事をなすためにあるのだ。人の一生は、その大部分を全く無駄に過ごすには、あまりにも短い。よい目的も意味もない楽しみ、そればかりか、悪い結果をさえともなうような楽しみは、楽しみとはいえない。ベンジャミン・フランクリンは実にズバリとこういつている。「余暇(レジャー)とは、なにか有益なことをするための時間である。」

8月19日

女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあるか。たとい彼らが忘れるようなことがあっても、私は、あなたを忘れることはない。見よ、私は、たなごころにあなたを掘り刻んだ。あなたの石がきは常にわが前にある。

(イザヤ書 49・15.16)

「大きすぎる靴をはくな」というのは、私の思いちがいでなければ、アラビアのことわざである。これは、高い地位にあっても人生が失敗に帰ることがよくあるということを説明するものだ。なぜなら、靴が大きすぎるとその人の足元が不安定になり、それに気づいた人びとから信頼をしいに失うからである。

しかし、それと同様に、靴が小さすぎると足が窮屈で、たえず痛みを感じさせるものもある。だから、これは取り替える必要がある。具合がよいのは、その人の地位がその成長と力量とにぴったり合っている時である。しかし、それは、人間的な賢さによって達せられるものではなく、ただ神の導きについての固い信仰によるのである。

8月29日

力づよい善人にならなくてはならない。すなわち、神の前には謙遜に、人間に対しては確固たる態度をたもち、また、たいてい無遠慮きわまる世間に対してはあまり柔軟すぎないことである。だが、そういうことは、世間に対して価値をおかぬ時にのみ、できることである。…

命令づくでは相手の抵抗にぶつつかることも、微笑を浮かべた親しみをもってすれば、うまく運ぶ事柄が世には少なくない。

おまえがさせたいことは、

むしろおまえの微笑でそうさせるがよい、

剣できりつけたりするよりも。

(シェークスピア)

9月3日

そこで高慢にならないように、わたしの肉体に一つのとげが与えられた。それは高慢にならないように、わたしを打つサタンの使いなのである。このことについて、わたしは彼を離れさせて下さるようにと、3度も主に祈った。ところが主が言われた、『わたしの恵みは、あなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全に現われる。』それだからキリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。だから、わたしはキリストのためならば、弱さと侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりとに甘んじよう。なぜなら、私が弱い時にこそ、わたしは強いからである。(コリント 12・7-10)

コリント人への第2の手紙12の7-10。使徒パウロがこの箇所での彼の「肉体のとげ」とか、彼をこぶしで打つ「サタンの使い」と呼んでいるのは、しばしば彼を襲ってくる、そして外的原因からは説明のつかない無気力以外のなにものでもなかったであろう。このような無気力は、明らかには存在しない事柄に対する気違いじみた不安にまで高まることもあり、またしばしば差し迫った災難に対する真の予感であることもある。

このような無気力に沈んだとき、即座に役立つ最上の慰めはこの弱さが神の命令を受け入れ進んでそれに従おうとする気持を高める場合は、その弱さが一つの強さともなりうること、また、人類の最も偉大な人びともそのような弱さを感じたのだということを、使徒パウロとともに常に念頭におくことである。およそ、高貴な精神をもつ人間を養い育てるための教育プランには、このような弱さもまた必要なものの一つである。

9月6日

しかし、わたしはなにを言うことができます。主はわたしに言われ、かつ、自らそれをなされたからである。わが魂の苦しみによって、世にあるあいだ、つつしんで歩きます。(イザヤ書 38・15)

イザヤ書 38 の 15。謙遜は、人間の心のあらゆる性質のなかで、おそらく一番生得の性質から遠いものである。人間は生来つねに、あまりに高慢であるか、あまりに臆病で小心であるかである。本物の謙遜は、自分のものでない力が与えられているという不思議な気持である。これはあくまで力の実感であるが、しかしこの場合、この力が神の恩寵によるものだという意識をともなっている。したがって、これだけが無害な力の実感である。しかし、イスラエルの預言者が王に語らせているように、このような謙遜はただきびしい苦難の時期を堪えて初めて人の心に生じるものである。

ヨブ記 40 の 4・5, 42 の 1 - 6、列王記 17 の 24。

見よ、わたしはまことに卑しい者です、なんとあなたに答えましょうか。ただ手を口に当てるのみです。わたしはすでに一度言いました、また言いません。すでに 2 度言いました。重ねて申しません」。 (ヨブ記 40 の 4.5)

そこでヨブは主に答えて言った。

「わたしは知ります、あなたはすべての事ができ、またいかなるおぼしめしでも、あなたにできないことはないことを。

『無知をもって神の計りごとをおおうこの者はだれか』。

それゆえ、わたしはみずから悟らない事を言い、みずから知らない、測り難い事を述べました。

『聞け、私は語ろう、私はあなたに尋ねる、私に答えよ』。

わたしはあなたの事を耳で聞いていましたが、今はわたしの目であなたを拝見いたします。それでわたしは自ら恨み、ちり灰の中で悔います。(ヨブ記 42 の 1 - 6)

こういう謙遜を備えたときはじめて、人間は神から完き幸福を与えられる状態になっているのである。歴代志下 31 の 21。

9月7日

本当の内的進歩が行われる仕方には、つねに三つの段階がある。第1の段階は感激であり、さながら枯柴をもやすように、勢いよくパチパチと音を立てて高く燃え上がる火焰である。第2の段階は、この炎々たる火がいくらか消え衰える状態であって、つい先ほどまで火焰そのものであった人と同じ人間とはどうしても信じられないことが多い。第3の段階は、いつまでも燃えつづける石炭の火の、たえまなく暖かさをあたりにひろげる、静かな、変りない焔に似ている。そこにはもはやすこしの動揺も変化もなく、その有益なはたらきは誰にもはっきり分かる。

人間の精神がなにか大事な問題で、この最後の段階にまでに達したならば、それは、内へむかっては平和、外へ向かっては力と呼びうるような、あの活動的な平安を得ることになる。

9月13日

多くの人たち、時には、特別に天分のある人さえ、自分が体験するすべてのことについて即座に判断を下さなければと思っている、たとえば、初めて会ったすべての人について、また2,3ページをめくっただけのすべての書物についても。それだから、しばしば判断を誤って、あとになって訂正せざるを得なくなる。あるいは誤りとわかって自分の考えを固執して、その結果、自分の品性をそこない、さらによくないことに、他人をもしばしば傷つけたりする。もしあなたがこのような習慣をもっているなら、しかも新聞通信員を職業としているのであれば、そのような癖をすててしまいなさい。

9月18日

最も力強い人生哲学は、勇気と神のみ心への献身との正しい混合から成り立つ。そのどちらか一方がちゃんと立派に現われない場合、事はうまくはこばない。

強いエネルギーが、ある程度の粘液質（ひどく興奮もしなければ急にさめもしない性質）と結びつくときは、戦時でも平時でも、この人生のあらゆる仕事を最も多くなしとげるものである。

「成功の秘訣は目的に対する不動の心である。」（ディズレリー）

9月22日

もしわたしが、真理の知識を受けたのちにもなお、ことさらに罪を犯しつづけるなら、罪のためのいけにえは、もはやあり得ない。

ただ、さばきと、逆らう者を焼きつくす激しい火とを、恐れつつ待つことだけがある。（ヘブル人への手紙 10の26.27）

クロムウェル（注）が彼の生涯の大事業に取りかかる準備時代に、従姉妹（いとこ）のセント・ジョン夫人に当てて、わたしはもう給金を前払いでもらっていると書き送ったのは、全く正しい。神は前もって支払いをされる。これから神に奉仕しようと決心した人が感じる気持ちは、長年にわたる誠実な奉仕ののちに抱く気持ちとまったく同じである。ただ、おそらくいくらか持続的でないだけの違いであろう。

天国はその主な部分を、すでにこの地上において、与えられる。同胞教会の讚美歌が「神の恵みを知れる人は、すでに勝利のほまれを手にしている」と言っているのは、真実である。

それゆえ、勝利のほまれをみずから進んで棄てるならば、自分自身に対してそれだけ—そう無責任だということになる。ヘブル人への手紙 10の26以下で、赦しのない罪について語っているのは、このような罪を指している。

（注）オリヴァ・クロムウェル（1599 - 1658）イギリスのピューリタン革命の中心的政治家。

9月24日

だから、わたしはキリストのためならば、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりとに甘んじよう。なぜなら、わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである。(コリント 12の10)

兄弟たちよ。あなたがたが召された時のことを考えてみるがよい。人間的には、知恵のある者が多くはなく、権力のあるものも多くはなく、身分の高いものも多くはない。それなのに、神は、知者はずかしめるために、この世の愚かなものを選び、強いものはずかしめるために、この世の弱い者を選び、有力な者を無力な者にするために、この世で身分の低い者や軽んじられている者、すなわち、無きに等しい者をあえて選ばれたのである。それはどんな人間でも、神のみまえに誇ることはないためである。あなたがたがキリスト・イエスにあるのは、神によるのである。キリストは神に立てられて、私たちの知恵となり、義と聖とあがないとになられたのである。それは、「誇るものは主を誇れ」と書いてあるとおりである。(コリント 1の26-31)

いつでも愛をもって真理の味方をする事、これがまことにわれわれの日常の活動的生活の課題である。

ある近代の文筆家(おそらく哲学者ニーチェ)は、倒れかけたものはなおも押し倒さねばならぬ、そうすれば強者、さらに最強者だけがこの世に残る、と言ったところ、彼自身、最後には大いに人手をかりなければならなくなった、この思想がもし一般に適用されたなら、それはほとんど民族大移動時代のモラルとひとしくなっていて、これは、倒れようとする者をささえ、倒れた者を助けおこすことを命じるキリスト教のモラルとは正反対のものとなる。

この世で最後に競技場に残るのはつねに一番強いものだということは、まさしく本当である。だが、その強さというのは、過大視された人間の力のことではなく、依りたのむ弱い者たちを助ける神の世界秩序である。このことは今日もなお、いぜんとして信頼すべき真実であることが自証されるであろう。

9月25日

キリスト教はすべての気高い性質をもっている人間の、真理と心のまっただき平安とに対する渴望をいやすことができるという、この経験上の証明に勝る、その真理の証明は他にない。…

およそキリスト教は非実践的な理想主義ではない。むしろ反対に、この世の唯一の実行できる、また実際に最も効果ある理想主義である。このことが、この世におけるキリスト教の永続的な意義である。

9月30日

大きな仕事の重荷を抱えた週日のあとで迎える日曜日がこのほかに楽しいように、苦難の後の幸福は最もさわやかで、危険も一番少ない。自己愛から根本的に放たれ、それが心にきざすたびごとに、すぐさま生身の悪魔のように憎むようになれば、すでに神の恩寵にあずかっていると確信してよい。なぜなら、そういうことはわれわれ内部における神のみわざであり、神の生ける臨在がなくては、決して起こりえないからである。

高き山よりの別れ

さらば、みどりの山地よ、
赤い花さく荒野よ、
自由のたのしい夢は消え、
はや秋が別れをうながす。

みじかい夏はすぎ去った。
牧者たちも谷へ降った。
すべての高い嶺々はふたたび
白い雪におおわれている。

みどりの森よ、ありがとう。
聖なる処にいたることができた。

私は森の清らかな泉を汲んで、
新しいいのちにみたされた。

心もすこやかに空しい瑣事から
解かれ、意志も自由になった。
私の前途には約束の地と
神の賜わる平安がある。

たのしい休らいのときは終り、
私は別人となって山を下る。
別れはつらい　しかし私は
求めていたものを既に見出した。